

コンフォートシューズとシューフィッターの“夜明け前”

シューフィル たち 城 一 生



「朝日新聞」家庭欄(1981年2月12日)に投書されたイラスト

「靴業界は流行ばかり追いかけていて、足に合った靴を作っていないのではないか？」そんな20代女性の声が、朝日新聞の1981年2月12日付朝刊家庭欄で紹介された。“こんなクツがはきたい”と題し

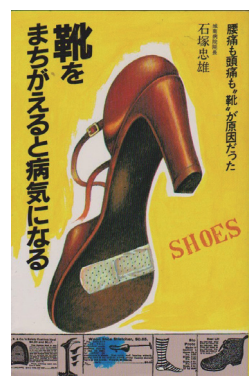
た提案イラストも添えられて……。

当時はトレンドとブランド追求に明け暮れていたファッション全盛時代。多くの靴メーカーはデザインと生産効率を優先し、小売店は足合わせを軽視した販売を行っていた。コンフォートを標榜するブランドは無く、足への健康への関心も低かった。投書女性の声に耳を傾ける業界人が何人いただろうか。提案に対して取材に応じた某靴団体の会長の答えも「こういう靴をつくっても一足も売れないだろう。足にぴったり合った靴をつくるのは簡単だが、足を美しく見せるのが靴の生命で…」だった。

しかし、市場変化は着実に進行していた。83年、整形外科医として多くの足疾患を抱える患者と接してきた医師による「靴をまちがえると病気になる」(主婦の友社)が出版され、外反母趾を始めとした足の疾患が社会的に注目される。84年には、靴業界で唯一、靴の機能研究や足の健康などの問題に取り組んできた日本靴総合研究会(現:一般社団法人足と靴と健康協議会)が「痛い靴はもうはかない」(講談社)を出版。その直後にシューフィッター講座をスタートし、翌年には制度化した。シューフィッター講座と相前後して

靴専門誌「フットウェアプレス」がフットケア&フィッティングキャンペーン記事を連載し、業界の変革を促している。86年、アメリカの靴市場ではファッション商品でもフィッティングやコンフォート性が重視されているという情報が寄せられ、日本の靴見本市に出品参加したドイツメーカーが自社商品のカテゴリーは“コンフォートシューズ”だとアピール。そして87年には第1回日本靴医学会が開かれ、今日でもなお靴と足合わせのバイブル的教本「プロフェッショナルシューフィッティング」が日本製靴(現:リーガルコーポレーション)から刊行される。

様々な事象を経て88年には足の健康をテーマにした「コンフォートシューズフェア」(エフワークス主催)が開催された。いつの間にこんなに増えたのかと思うほどの自称を含めたコンフォートブランドが多数出品され、ライセンスやDCブランドを追いかけていたどこかバブル気分の小売店のバイヤーまでもが来場した。この頃になると、ファッション雑誌でも足の健康、履きやすい靴の特集などが増え、コンフォートシューズやシューフィッターの存在と価値が一般にも知られるようになっていった。



「靴をまちがえると病気になる」(石塚忠雄著、主婦の友社発行)



「痛い靴はもうはかない」(日本靴総合研究会編、講談社発行)